

第九章 人と喰う鬼

1.

「なあ吉野。どこへ行くのだ？ その、私からも話したいことがあるのだが……」

伊吹は困惑しながらそう尋ねた。

二人はどんどん海岸を歩き、人混みから離れ、誰もいない磯の辺りへと進んでいた。もう、花火の穴場を探して歩いている人影も見あたらない。黒い海の音が、やたら耳を衝く。

「こっちの方が、花火が見やすいんだよ」

吉野はそう、平然と応じる。伊吹の右手を握るその手は、野球で潰れたまめの跡が残っていて硬く、ごわついている。力も強く、伊吹のことを決して離そうとはしなかった。

周りに明かりらしいものは何もない。すでに遠く離れた祭りの会場から届く光以外、二人を照らし出すものは何もなかった。そう思って、伊吹が不安になったのとちょうど同じタイミングで、吉野は立ち止まると、肩から提げていた大きな鞆の中を探り、懐中電灯を出してきた。

懐中電灯の光に丸く照らされた砂浜を、二人は歩いていく。そうする間にも、何発も花火が打ち上げられ、その度に遠くから歓声が上がっていた。歩きながら、伊吹はそんな空を見る。

吉野は口を開いた。

「前に伊吹、どうして俺がそんなに熱心に鬼について興味を持つのか、って訊いたよな？」

「あ、ああ……」

「うん。理由は、色々あるんだけどさ……一番最初のきっかけは、俺、鬼になりたかつたんだよ」

吉野は言う。驚いた伊吹は、聞き返した。

「鬼に、なりたかった？」

「そう。小さい頃、まだ元気だった母さんに、よく昔話を聞かせてもらってたんだけどさ。その中に出てきた鬼に、すごく憧れたんだよな」

横顔を見せた吉野は、照れ笑いを浮かべている様子だった。

「母さんはこのこくりのの生まれで、ここに伝わる昔話をたくさん知ってるんだ。そのどれにも、いろんな鬼が出てくるんだよ。人を襲う大きな鬼、弱々しくて泣くと川が洪水になる鬼、人と協力して悪者と戦う鬼、それからもちろん、スクナ様な。ここに引越してきたのは何年前、中学に入ってからだけど、そのずっと前から、こくりのってどんな場所なんだろう、って想像してたよ。賀茂寺のことも、名前だけは知ってた」

「へえ……」

「俺、オヤジの転勤の都合で、昔から引越しが多くてさ。あんまり友だちとか作る暇がないことが多かったから、学校でもひとりぼっちになることが割とあって。その度に、自分が鬼みたいに強い人間になればいいのって、ずっと思ってたんだよ……自分が弱くて情けないから、こんなに辛いんだろうなって。母さんの昔話に出てくる鬼みたいになれば、こんな苦しむこともないんだろうなって、思ってたんだ。今の俺見ると、そんな感じ全然ないかも知れないけど」

「うん……そうだな」

伊吹は頷く。そこで振り向いた吉野は、いつもの笑顔を見せた。

「よかった。そういうえば野球始めたのも、最初は友だちが欲しかったからだったな……どこ行っても、野球の話題なら通じるから。で、俺が中二の時に、母さんの事情でこの町に家を建てて落ち着くことになって、それでやっと、俺の気持ちも多少は落ち着いたんだ。紅葉や紺とも知り合ったし」

「ここかな、と小声で言うと、吉野は砂浜の端にある、暗い磯の腰を下ろした。」

伊吹も、その隣に座る。吉野はそこでようやく、手を離してくれた。同時に懐中電灯を切る。伊吹が空を見ると、綺麗に全天がうかがえた。雲間に辛うじて、月が見えている。人も他には見あたらず、絶好のシチュエーションだった。二人が腰掛けた磯はごつごつとした黒い岩が並んでいて、波の音が一定の間隔を空けて響いていた。

「でもやっぱ今でも、鬼には憧れてるな」

「そうなのか……」

伊吹は相づちを打つ。吉野がここまで連れてきてくれた意図が今ひとつ

分ならず、首を傾げた。確かに空はよく見えるが、もう少し手前の砂浜でも充分だっただろう。ここは海も近くて風もあり、少し肌寒いぐらいだった。

また吉野は呟いた。

「鬼になれたら、母さんを助けられるかも知れない、って、今でもちよつと思うんだよな」

「……」

伊吹はあの日の、静寂に充ちた吉野の家の様子を思い出しながら、沈黙していた。

彼の家に何が起き、どうしてあのようになったのか、様々なことを伊吹は想像していたが、もちろん直接尋ねる気にはなれない。伊吹自身、自分の家族にこの十数年で起きたことを問われたら、うんざりするに違いないからだ。家族にはそれぞれ、違った過去があり、事情がある。それは言葉では、説明できない類のものだ。自分の胸にしまっておくだけで、たくさんだろう。

ただ、いつまでも棟に閉じこめておくだけだと、いつか苦しくなってしまうかも知れないが。

「……この磯の辺りって、自殺の名所なんだよ」

「はあ？」

不意にとんでもないことを言われて、伊吹は裏返った声を上げてしまう。

それを聞くと、吉野は少し可笑しそうに話した。

「けっこうここから入水する人が多くて。遺書がその辺に置いてあったり、靴がそろえておいてあったりするんだ。江戸時代頃から、そういうスポットとして有名ならしい。地元の人を知ってるから、だから、特に今みたいな夜には、この辺りには近寄らないんだよ」

「ふうん……」

「でもその分、花火を見るのには都合がいい。縁起が悪いとか、伊吹は気にしないだろ？」

「まあ、そうだな」

「やっぱり。俺も割とどうでもいいから。だから毎年、一人でここで見てる。内緒の場所だ」

吉野は嬉しそうに微笑んで、花火を待っていた。伊吹は、そつと息を吐く。

吉野は再び、口を開いた。

「……隠野には、山から生まれて川を下り、海で死を迎える、っていう考えがあるんだよ。聞いたことあるか？」

「前に、宇治川さんが話していたな」

「ああ、そうだったか。ほら、山っていうのは生命が誕生する場所だろ？草木が芽吹いたり、風が吹き下ろしてきたり。で、そこから川が流れ出す。そして最後に、海に至る。だから、この隠野の海を浄土と考えて、向こうにはあの世がある、っていう考え方、浄土信仰が、昔からあったんだってさ。それで救いを求めて、ここからあの世へ渡ろうとする人が、大勢いたんだって」

「へえ……」

「死んでしまうのが救いになるのかどうか、俺にはよく分からないけど。で、実はその繋がりもあって、この磯を降りて少し南へ行ったところには、入り江みたいになった洞窟があって、その中に、小さいお社があるんだ」

「そうなのか？」

「誰がいつ作った物なのかははっきりしないんだけどな。それで、このお社にも一応、スクナ様とは別の大鬼の神様との繋がりのある伝承が残されているらしい。どんな内容なのか、俺はまだ調べ切れていないんだけど……さらに、この海辺のお社が、あのスクナ様の伝承にある、山の洞穴のお社、鬼を封印したっていうアレと対になっていて、これで、山から海へと続く隠野の大曼荼羅が出来上がり、っていう、宗教学上の解釈があるらしい」

「よく知っているな……」

伊吹は真面目に感心して、声を漏らした。曼荼羅というのは確か、仏教の用語である。伊吹はよくは知らないが、世界像、世界観、というような意味合いなのだろうか。この隠野という土地全体に刻み込むようにして、そんな物語が隠されている、ということになる。古い考えというものも、なかなか大したものだな、と伊吹は思う。

「いや、単にあの渡邊教授の書いた本に載ったことを受け売りしてるだけなんだけど。教授によると、山の社のそばには隠野川の源流があつて、それが市街を通つて、このすぐ近く、つまり洞窟のそばで海に流れ込んでいる、と。これで一本筋が通るよな。そこから先は、宗教学とか民俗学の小難しい話が続いて、正直よく分からなかったよ」

「確かに、社のそばには川が流れていたな……」

四月のことを思い出して、伊吹はつい何気なく呟いた。紅葉と歩いた道すがら、水音を聞いた憶えがある。もうずいぶん、前のことのような気がした。

すると、吉野が急に興味を持ちだした。

「え！ 伊吹お前、山の社に行ったことあるのか!？」

「あ、ああ。まあ……そう」

「さすがだなあ。それってやつば、賀茂寺の娘だからか？」

「いや、そういうわけでもないのだが……」

伊吹としてはあまり話したくない話題なのだが、しかし吉野がひどく興味を持ってしまった様子なので、やむを得ない。仕方なく伊吹は、四月に紅葉と社へ行った話をした。一応念のため、観音開きを開けてしまったことや、鬼の腕のことなどは伏せておいた。この調子だと、そこまで話してしまつてはどうなることか、分かつたものではない。

しかし、それぐらいの話では、吉野を抑えることは出来なかった。

「へーそっかあ。いいなあ……俺も、いっぺん行つてみたかつたんだよなあ。スクナ様の話を聞く度に、そう思つた。どんな場所なんだろう、ホントにあるんだろうか、つて。ホントにあるんだなあ」

「ああ、まあ……」

「いいなあ。行きたいな。うーん……なあ伊吹。今から行かないか？」

「い、今から？ いや、もう夜だぞ。それにまだ、花火もあるし。山を歩いて一時間ぐらい掛かるし……」

それに――。

最大の問題は、あの大鬼が彷徨っているかも知れない、ということだった。ことこんな夜に山へ入ったら、巡り会つてしまう確率も高いだろう。直接には言い出せないながらも、それが一番心配だった。

しかし、吉野も引こうとしない。

「四月に行ったときも夜だったんだろ？ 花火なら、見終わってからでいいよ。山で伊吹が疲れたら、おんぶでもだつこでもしてやるって。昼間に山に入り込んだら、誰かに見つかるかも知れないし。せつかく行くんだつたら、今日行こうぜ。な、いいだろ？」

普段は年の割に比較的落ち着いている印象の吉野が、珍しく目を輝かせてそんなことを言っている。こんな間近に、しかもこんなシチュエーションでお願いされてしまつては、伊吹としても無下に断ることが出来なかつた。

「う、ん……分かつた。そう、だな……山に入るかどうかは、そのときになつてから考えよう。状況を見て判断する。一応、危ないかも知れないし……それに、ほら、私が電車で襲われた、熊の話もあるだろう？ 夜はやはり、気を付けないといけないから。花火が終わるのが、九時だったか？ では、その後だ。危ないと思つたら、すぐに戻るようにしよう。それでいいな。紅葉には……後で伝えればよいか。うん。それで……ところで、吉野。その、前にメールしてくれた、件についてなのだが……大切な話とこのままだと鬼の話に終始してしまふような気がしたので、伊吹はやむを得ず、自分から話を切り出した。そう聴いた吉野は、ああ、と照れ笑いのような表情を浮かべた。

「そうだな。うん。それは……これから、話すよ」

そう言つて、吉野はまっすぐ、伊吹の方を見た。

「ちようどいいタイミングだ」

ひととき大きな花火が、また空に上がった。

2.

「お、みんな楽しんだ？」

一時間ほどが経つて花火が終わり、人波も町に引き始めた頃、紺は砂浜でそう話しかけられて、くるりと振り向いた。

声を掛けてきたのは、あの女性の刑事だった。確か、道成寺と言ったか。彼女はにっこりと笑って腕組みをし、紺を見ている。紺は呂律の怪しい声で言った。

「あゝ刑事さん。ふあいもう、みんな大盛り上がりで。楽しかったれすわー」

「……ん？ ちょっと、顔が赤くない？」

首を傾げて眼を細めた刑事に言われて、紺はハッと眼を見開いた。両手で自分の口を塞ぐ。実は伊吹を見失ってから、今度は紀乃にもらって、また缶を一本空けている。

「あ、いやいやいや、まさかそんな、えとあの、子どもビールですハイ、ははは」

「まー……お姉さんにも、憶えがない訳じゃないから。見なかったことにしますか。お祭りだしね。でも、少年課のオバサマ方が見逃してくれるとは限らないだからねえ」

「はーい……」

紺は身を縮める。紺の隣ではそんなやりとりを見て、澄哉が浴衣の袖で口を隠し、くすくすと笑っていた。実はこちらも一口二口呑んでいたのだが、意外と澄哉は顔に出ないタイプだった。

「紺ちゃん！ 叔父さん叔母さん見つけたにー！ 二人ともベロンベロンやから助けてー」

すると、紅葉がみわ、ほたると一緒に、道路の方からそう呼びかけてきた。あーいと言って手を振った紺は、刑事に向かって言う。

「ほな刑事さん、うちらもう家に帰ります。お疲れ様でしたー！」

「あー、うん。あのさ……ところで尾津野さんと、吉野くんはどうしたの？」

刑事は辺りをきよろきよろと見まわしている。それを聞いて紺はプクク、と意地の悪い笑みを浮かべた。

「もー！ イヤやわあ、刑事さん。そこら辺は汲んでもらわんと。年頃の二人、夏祭り、花火の下、共に過ごす大切な夜の時間。こんなんなったらノンストップに決まってますやん！ 今晚二人が帰ってけえへんでも、うちはおかしいとは思わんな。ウン。あーうちもガンバラな。なあなあすみちゃん、うちなんかどーお？ うふふ」

「ぼ、僕はいよ……」

顔を引きつらせた澄哉は目を背けた。紺は頬をふくらませる。

道成寺刑事は、もう一度尋ねた。

「えつと……どういうこと？」

「花火の途中から二人でどっか行ってしまったんです。電話掛けても、い

ぶちゃんも吉野も出えへんし」

紺は、満面の笑顔で応えた。

それを聞いた道成寺刑事は眉間に皺を寄せ、苦い声で呟いた。

「……まずい、ね」

3.

——磯での会話から、およそ一時間後。

伊吹は吉野と共に、あの金網の前に立っていた。

その向こうに広がる、夜の隠野の森は深く、暗い。吉野が懐中電灯を向けたが、奥に何があるか、何がいるかまでは、見通すことが出来なかった。

ここまでの通り道の町には、まだほとんど人が戻っていないかった。祭りの

日程自体はもう全て終わったのだが、屋台は出ているし、飲み食いを続けている人が多いのだろう。結局二人は誰にも見られずに、ここまで来た。

あの花火の後から、伊吹は紅葉にも連絡を取っていないかった。そればかり

か携帯は、電源を切っている。

「……ここだ」

「……ここだ」

伊吹はそう、ぼつりと言った。目の前には、錠の付いた扉がある。

「開けてくれるか？」

吉野が言う。伊吹は身をかがめ、記憶に残っているあの時の数字にダイヤルを合わせた。そして、軋む音と共に、扉を開けた。

伊吹は先程からぼんやりとしていて、あまり、頭が働いていない気がした。

この中には何かがあるかも知れない、気を付けるべきなのかも知れない、ということとは、頭の片隅にあるのだが、ろくに考えられなかった。今

自分が何をしていて、どこへ向かっているのかも、はっきりと意識できて

いなかった。二人は黙ったまま、山へと入り込んだ。

伊吹は自分の記憶の通り、社へ向けて歩いていく。伊吹も懐中電灯を渡されていて、周囲をちらちらと見廻した。およそ四ヶ月前、四月にここへ入ったときは、雰囲気がるまるで違っていた。夏らしい、蒸す熱気が強い。四月はまだ少し寒くも感じられたものだったが、今は湿り気が、肌貼り付くかのようだった。

もちろん町中の方が、暑苦しいという意味ではずっと上ではある。しかし山の熱気というのは、それとは全く違ったものだった。酸素が濃いのだろうか。草木の薫りが強いからだろうか。気持ちをおぼろげに、強い力の籠もった空気が、辺りにもうもうと充ちていた。息を吸うだけで、森の生気が身体に入り込んでくる気がした。

二人は手を繋いだまま、ただ黙々と、真つ暗な森の道を歩いていた。

伊吹は言う。

「……なあ。言っておくが、別に何も無い場所だぞ」

「分かっているよ。いいんだ。それで」

吉野は平気で応える。その瞬間、脇の草むらから虫が飛び出してきて、伊吹はびくりと身を震わせた。蝉の音が、強く聞こえる。時折山の奥から、鳥の鳴き声も響いてくる。

思っていたよりもずっと早く、自分たちは社へ向かっているようだ、と伊吹は考えた。二度目ということもあり、自分の記憶力なら、道が在ってないようなところであっても、迷うことはない。坂を上り、草の合間を抜け、木々の脇を通り過ぎ、川の端を遡りながら、二人は山を、奥へ奥へと進んでいく。意外と浴衣が汚れずに済んでいるな、とだけ、伊吹はまた考えた。

交わす言葉は、何もなかった。

ふと気づくと、二人はすでに、あの社のある洞穴のそばまで着いていた。異様に早く着いたのではないか、という気が伊吹はしたが、時計を見てみると、森に入ってから早くも四十分弱が過ぎている。前回よりはかなり短時間ではあったが、自分の感覚で思っていたほど早くはなかった。たぶん、連れが紅葉でなく吉野であることも大きいだろう。足の速さが全然違うし、それに、紅葉は行きたくないと言っていたが、吉野は積極的に足を

向けている。

それに何より、伊吹の時間の感覚が、麻痺しているに違いない。

「ほら。あそこの洞穴だ。あの中に社がある」

伊吹はそう言って、懐中電灯で指してみせた。すると吉野は、嬉しそうに歩み出て行った。伊吹も、その後から続く。

四ヶ月ぶりに足を踏み入れる洞穴は、あの時と変わらず静かで、寒々としていた。奥の方から時折びょうびょうと風の音がする辺り、もしかするとここはどこか、別の出口へと繋がっているのかも知れない。二人は洞穴の中を歩いていく。吉野が光を向けると、壁を這う蔦、湿った中の岩、そこにはびこる苔がちらちらと見えた。

そうしてようやく、二人はあの社の前までたどり着いた。吉野は近くの岩の上に、持っていた懐中電灯を置くと、どこかのボタンを押した。すると、その胴の部分が光り出し、ランプのように洞穴の中を淡く照らし出した。

「あれ……開いてるな」

吉野は、ぽつりとそう呟いた。伊吹はしまった、と思い、口を一字に結ぶ。吉野の言葉通り、社の観音開きの扉は、開かれたままの状態で放置されていた。

四月に伊吹と紅葉は、社の扉を開けたままにして帰ってしまったのだ。今から考えれば、きちんと閉じておいた方がよかった。四月の時点では、まさかこんなところまでこんなものを見る物好きが、自分たちの他にいるとは思っていなかったのである。

吉野は腰をかめると、封を解かれ開けっ放しになった扉を、じっと見つめていた。

「どうなってるんだ、これ。鬼を封じてるはずだったのに。何で開いて……」

…伊吹、か？」

「……」

伊吹は何も、応える気にならない。

「だって、ここへ最後に来たのは伊吹と紅葉だろ？ 来たときすでに開いていたのか？ 誰かが開けていったのか？ それとも、伊吹がそのとき開けたのか？」

吉野は尋ねてくる。怒っているのか単純に訊いているだけなのか、声色だけでは判断できなかった。洞穴が暗くて、どんな表情なのかははっきり見られない。

「……わ、悪気があった訳ではないのだ」

ひどく言葉に迷いながら、伊吹はようやく、そう言った。

「そのときは、何も考えていなかった。紅葉や町の人が、鬼を信じていると聞いて……それでそのときは、無性に腹が立ってしまった。筋道の通らない迷信を信じているというのが我慢ならなくて、それで紅葉に教えてやるうと思つて、それでこの社を、開けてしまったのだ……」

「伊吹が開けたの？」

「ああ……そうだ」

「中には何が入つてた？」

「……特に、何も」

緊張しつつ、伊吹はぼつりぼつりと応える。吉野はこちらへ振り返りもせずに、しきりに社の中を覗き込み、手を突っ込んで調べている様子だった。隅から隅まで何か残されていないかと、丹念に探っている。

それから、すつくと立ち上がった吉野は、伊吹の方へ向き直つて、こう言った。

「すごいじゃん。封印を解いたわけだろ？ 鬼を封じた人間の子孫である

伊吹が、鬼を解放したわけだ。お手柄だな」

「……」

伊吹は、快活な表情でそういう吉野の顔を見て、それからまた俯いた。

「……お手柄？」

「そうだよ。すごいことだろ。平安時代からずっと封印されてた鬼おに、つていうかこの場合は、鬼まかな。そういう何かよく分からないナニモノカを、尾津野家の末裔である伊吹が、開け放つたことになるじゃん。おかげでそういう、昔の人間なら持っていた強い力つていうか、不可思議なモノ、かな。そういうものが世の中に出ていったってことになるだろ？ いいことだと思わないか？」

「……いいこと？」

伊吹は小さな声で尋ねる。いいことってどういうことだ、と尋ねたつも

りだった。

けれど、吉野は、何も答えなかった。

洞穴の外から、ぱらぱら、という小さな音が聞こえる。

それから、雨が降り出したようだった。洞穴の中に雨音がかすかに反響し、さあつとホワイトノイズのように耳に届く。

吉野は小声で話す。

「海辺の社の中には、法具とか経文とか、古い道具が納められていたんだよ。昔、鬼を封じるときに使ったのかな。いや、あれはレプリカかも知れないけど……とにかくそのせいで、これを入れる場所がなくてさ。ちょうどよかった」

吉野は腰を落とすと、肩掛け鞆を下に置いて、ジッパーを開いた。

そして中から、皮の鞆に入れられた大振りの特種ナイフ、ロープ、折られたゴルフクラブのヘッド、それから——数枚の鬼の面を取り出した。

雨の音が聞こえる。

伊吹は洞穴の出口に背を向けて、そんな作業をいそいそとこなす吉野を、何も言わず見つめていた。

何も考えることが出来ない。

「……そこに入れて、どうするのだ？」

「うーん。手元に置いておくのが不安になってきて。ほら。あの道成寺刑事、明らかに俺のこと疑ってるだろ？ 偶然のフリして、俺たち二人が一緒にいるところにやたら現れるし。俺らのこともしつこく質問してくるし。さつきはつい挑発に乗って、あんなこと長々と語っちゃったから、たぶんこれから、本腰を入れて調べてくれると思う。下手にどこかに捨てると見つかるかも知れないから、ここに隠しておくよ。これで扉を開けておけば、さすがに警察でも、無神経に搜索したりはしないとと思うから」

これまでとまるで変わらない口調で、吉野は冷静に言った。確かにその通りだ、と伊吹は思った。凶器の隠し場所としては、この上ない。

それから、伊吹はこうも尋ねてみた。

「どうして道成寺刑事は、お前を疑うようになったのだろうな」

「まあなあ……色々あると思うぜ。被害者の年齢や性別を見ると、高校生以上の男が渡邊教授以外一人もないから、プロファイリングすると大体想像つくのかも知れないな。でも、どうしようもないよ。そんな俺より年上の、脂ぎったオッサンに手を掛けるのは難しいし、綺麗じゃないし……あと、渡邊教授の事件の取り調べで、色々鎌掛けられたから。その中で何かに引っかけたのかも知れないな。伊吹は何か、思い当たることあるか？」

「……渡邊教授の遺体の腐敗を抑えるために、冷房が過度に掛けてあったのが、気にはなった」

伊吹は無感情に応えた。

「腐敗しないようにしたのは、ああいうオブジェのような状態にした遺体を、少しでも綺麗な状態に保ちたかったからだろう、と推測した。道成寺刑事も、犯人は以前から遺体を独特の美意識を持って扱っていた、と話していたから、それがたぶん正解だろう。だが、独居老人があんな場所で亡くなっていたら、どのタイミングで遺体が発見されるかなんて普通分かるはずがない。全く渡邊教授の家族構成や生活習慣を知らない人間なら、あの加工を完成させた後は諦めてそのまま帰るか、もっと見つかりやすい場所に遺体を置くのが筋だろう。わざわざ腐敗が進行しないようにする、ということとは、見つかるタイミングが分かっている人間が殺した、と考えられる。言いかえれば、まだ遺体が綺麗な段階で発見されると知っている人間だ。そういう人間は、この場合三パターン考えられる。一、渡邊教授が宇治川さんと同居しているため、彼がすぐに帰ってくるだろうことを把握している人物、二、宇治川さん本人、三、遺体を見つけた、私たち四人の中の誰か。私は……最初、二を疑い、次に一を疑っていた」

「なるほどね。三だとすれば、一番怪しいのは全てを企画した俺か。さすがだな、伊吹。次からは気を付けるよ」

吉野は悪びれる様子もなく、そう言った。

伊吹はまだ、この事実をどう受け止めたらいいいのか、分からないままだった。

表の雨は、次第に激しくなりつつあるようだった。

「……どうして、なのだ？」

伊吹はぼつりと尋ねた。

「ん？」

「どうして、あんなことをした？」

「あんなこと、っていうのは、殺人か。さつきよりもっと、具体的な説明が欲しい、ってことか？」

そう言うと、吉野は改めて腰を上げ、伊吹の方へと向き直った。先程磯で、花火を見ながら静かに伊吹に対して自分の凶行を告白したとき、吉野は動機について、こう話していた。

——だから俺は、鬼になりたかったんだよ。

背後に雨音を聞きながら、伊吹は頷いた。

「よし。分かった。じゃあ、順を追って話す。最初に思い立ったのは、四月頃だったと思う」

吉野の低い声は、洞穴の中にぼんやりと反響していた。

「高校に入ってから部活も勉強も忙しくなって、家に帰るのが遅くなるだろ。中学の頃は別に勉強なんかしなくても、授業について行けたけど、俺国立ねらいだから、しっかり勉強しないと敵しい。父さんはもう何ヶ月も、このこくりの家には戻ってきてないから、母さんの世話が出るのは俺だけだ。かといって、下手に高校の方の手を抜くと、クラスメートや近所の人から不審がられる。それは、母さん自身も望んでなかった。だから、全てを精一杯頑張ったんだけど、やっぱり体力的にも限界でさ。夜もろくに眠れないし、疲れて疲れて、月末には倒れそうになってた。楽しみすぎていたら、鬼のことを書いた本を読むぐらいだったな。ひどい状態だった。そしたら……ある晩突然、夢に、鬼が出てきたんだよ」

吉野は平然と、そんな話をする。

「どんな外見なのかははっきり思い出せないんだけど。でも俺にはそれが鬼だってことは、感覚的によく分かった。眼をぎよろつかせて、歯を剥き出しにして、髪を振り乱して、仁王立ちになって俺の前にはいた。俺はその身体から発散される力に気圧けおされて、動けなくなってた。威圧感って

うのかな。そしたら、その鬼が言うんだよ。『お前の望みは何なんだ』って。すごい声だった。未だに耳に染み付いてる気がする」

吉野は今でもまっすぐ、伊吹を見据えている。

けれど伊吹は、彼が本当に自分を見ているのか、確信が持てなくなっていた。

「俺は何か応えた。『鬼になりたいんです』って。俺の小さい頃からの夢、望みって、それぐらいしかなかったんだよな。他の子たちがヒーローに憧れるようなもんでさ……鬼みたいに、強い存在になりたかった。父さんがどんな勝手な振る舞いをして、母さんがどんなに苦しんでいても、自分の力で何とか出来る、そんな強い人間。いや、人間以上に強くなりた、俺はずっと、そう願っていたんだ。だから、夢の中の鬼に頼んだ。そうしたら……その鬼が、俺に乗り移ってきたんだよ」

伊吹は懸命に、吉野の流れるような言葉を理解しようと努力する。

しかし、洞穴の外の雨音ばかりが耳に届いて、彼の言葉を、頭が処理しようとしなかった。

「恐怖と恍惚が一緒になった、不思議な感覚だったけど。その恐ろしい鬼が俺の中に入ってきたんだよ。口から入り込んだんだったかな……はつきりとは、思い出せない。夢の話だから。とにかく、鬼が俺に入って、俺の中は、いっぱいになった。それで、俺の心は変わったんだ」

「……変わった、た？」

「そう。疲れとか、絶望感とか、罪悪感とか……そういう弱さと繋がるようなモノが、断ち切られたとでもいうかな。いろんなものから、自由になった気がした。楽な気持ちになったよ。普段の生活で無理を重ねても、いくらでも耐えられるようになった。でも、それだけじゃない。そんなものを捨て去ると同時に……自分がすごく、二面的になっていくような感じがあったんだ」

吉野は言葉を切り、少し視線を逸らした。

「表の普段の生活で負の感覚を断ち切って、あくまで快活な野球部の男子高校生、として振る舞えば振る舞うほど、その……何とかな、自分の中にいる鬼が、大きくなっていくような感覚があるんだ。段々、内側で暴れ回るあの鬼が、抑えきれないほどに巨大になっていく。我慢できないぐ

らいふくれあがって、大きくなった鬼が、たまに俺の表側に現れるんだ」

「それは……多重人格みたいなものか？」

「いや、違うと思う。鬼が表に出てきているときも、俺は俺自身の意思で動いてるし。鬼のせいにするつもりはない。どちらも俺なんだよ。まともな善人、誠実で感じのいいヤツとしての俺、それから、悪意とか邪念の塊のような、鬼の俺。どっちも、俺自身だと思う。分かるかな。とにかく、そっち側の俺、鬼の俺が表に出ると、俺にとっては自分の中にある衝動とか欲動とか悪意とか、そういうものに従うことが当然になるんだ。それでよい、それが、自然な振る舞いだ、ということになる。ぱつとルールが切り替わる、っていうイメージなんだけど……でも、その二種類のルールに従っている俺は、どっちも俺なんだ。伊吹、分かるか？」

「……」

伊吹は何も答えなかった。

「そういうときの俺を統べているのは、純粹に衝動なんだよな。突き動かすような感覚。そんな衝動に従っていると、ものすごく幸福になれる。最初にそういう感覚に陥ったのが、五月半ばぐらいのことだった。休みの日の夕方に、海に一人で来ていたら、無性にそういう気分になって……そのとき偶然、近くの道端で中学生らしい男子を見つけたんだ。ちよつとひ弱な感じで、ぼうつとした。周りには誰もいなくて、俺はそいつと、二人きりだった。ああ、今だな、と俺は思った。それで……そいつをあゝの窟戸神社の裏まで連れ出して、首を絞めて、殺したんだ」

洞穴の奥から、風のうなるような音が聞こえた。

「そのときは、そのままにして家に帰ったんだけど……案外見つからないもんなんだな。夜になっても報道とか全然なくて、拍子抜けして。で、夜中に急に、目が覚めたんだよ。色々そのときになって思いついて……それで、手元にあった民芸品店の鬼の面を持って出かけて。行ってみたら、神社の裏には、まだそいつの死体が転がっていたから、神社の納屋に置いてあった鉈、これだよ、これを使って、そいつの首を切って。お面を被せて、近くの道路に残して、それで、帰ってきた」

少し話し疲れたのか、軽く咳払いをした吉野は、手に取った鉈を社の中に戻した。そして今度は、鬼の面を一枚取りだし、暗い中でぼんやりと眺

めていた。

「……後は、その繰り返しだな。普通に生活して、自分の中で鬼が大きくなって、人を殺して。そうしたらまた鬼がすぼむから、普通に生活が出来るようになって。その繰り返し。日常生活の中に、そういう流れが組み込まれるんだ。そのおかげで、俺はまっとうに生きていける。こんな生き方はおかしいのだろうな、とは正直、俺自身も思った。人間としては異常なんだろうな、と理屈の上では感じた。でも……自分にとってはそれが、あまりに当然で、普通のことと感じられてしまったから、だから、やめることが出来なかったんだ。幸い、俺とは何の繋がりもない赤の他人を、衝動的に殺していくだけだったから、二ヶ月が過ぎて三人を殺しても、全然警察に疑われることはなかった」

「……渡邊教授は？」

「そう。その中で、教授だけはそういう、自然の流れで殺した訳じゃなかったんだ。だから、上手く行かなかったのかも知れないな。教授と最初に知り合ったのは、四月頃だった。一番疲れ果てた頃だな。町中で教授の鬼に関する本を読んでいたら、向こうから話しかけてきて。それで時々ばたで会うと、話すようになって……でもほら、俺って、普段は普通に振る舞ってるけど、鬼の話になるとつい異様に乗っちゃうだろ？ 伊吹たちに対してもそうだから、あの教授に向かっただともう面白がりすぎて、話が弾んじゃって……それで、とうとう教授に怪しまれるようになったらしいんだ。考えてみればそうだよな。鬼の面を付けて殺されている人間がいて、同時に、鬼のことにすごい興味を示してる男子高校生がいたら、勘のいい人なら怪しむよ。でも俺は、疑われてるってことに先月のあの日、家に行きたいって教授に連絡するまで全然気づいてなかったんだ。バカだよ。明日友だちとお宅に伺いたいんですけど、って夕方に電話したら、ちよつと今から来なさいって言われて。家に行くのは初めてだったから、結構浮き浮きして行ってみたら、教授一人しかいなくて。そこで、自首するように説得されて。たぶん宇治川さんがいないタイミングだったから何だろうな。でもそういうわけにはいかないから、だから……その場で首を絞めて、殺した」

吉野はため息を吐いた。

「状況から言って、下手に見つかりやすいところに死体を放置したりしたら、一番疑われるのは俺だ。直近で接触したのは俺一人だから。それは証拠が残ってる。かといって、翌日にみんなと一緒に教授へ会いに行くのをキャンセルするわけにもいかない。一番いいのは、俺自身が複数いる発見者の中の一人になることだろう。他の方法だと、俺一人が悪目立ちしてしまうから。そう思って、ああしたんだけど……確かに、腐らないように冷房を掛ける、っていうのは、不自然だよな。あの時は混乱していて、そこまで頭が働いていなかったんだろう。やっぱり鬼になっている時じゃないと、駄目だな」

そう言って、吉野は頭を掻いた。

「どうだろう。伊吹、俺の言っていること、分かってくれたか？」

伊吹は——泣き出したいような気持ちに駆られていた。

とにかく、今すぐにも泣き出してしまいたかった。説明しがたいほど、強い感情だった。伊吹自身は幼い頃でも、泣き喚くことはほぼなかった。理論的で、落ち着いた子どもだった。けれど今、何もかもを投げ出して、ひたすら泣き続けたい、そんな気がした。

伊吹にとつて、吉野とのことは何もかも、初めての経験だった。この二週間というもの、決して長くはない期間だったが、それでも、これまで一度も体験したことのない感情を、繰り返し覚えた。それが愛情と呼ばれるものなのか、恋と呼ばれるものなのか、伊吹には分からない。吉野に告白されてこの方、他のことには頭が回らなかった。半ばパニックに陥っていたけれど、今から思い返せば、その感覚は心地よいものだった。

論理で解決できる問題はどこにも見あたらず、かといって、感情に身をゆだねなさい、と言われても、どうすればいいのか見当すら付かなかった。そんな中で、伊吹はひたすらに考え、悩み抜き、そして今日、吉野に応えようと思っていた。そのために蓄えていた、特別な感情があった。今、それが行き場を失い、せめて涙として流れ出したがって、伊吹の中でくすぶっていた。

しかし——涙は出なかった。どうしても、出てくれなかった。

涙と共に、今胸の内にあるものが流れ出してくればよいのに、と心底から伊吹は思った。でも、どうしても、泣くことが出来なかった。気持ち

も身体も麻痺して、動かなくなっているような気分だった。

伊吹は、不思議なほど静かに訊いた。

「これから、どうするのだ？」

「……もう、止めにするよ。今以上に疑われたら、逃げる事が出来ない。あの道成寺刑事はかなり賢いから。本気で追求されたら、たぶん俺はアウトだ。今でも危ういのに、次殺したら確実に捕まる。そんな気はない。だから、これでやめる。道具もここに仕舞って、おしまいにする」

「そうか……でも、『鬼』はどうするのだ？」

伊吹は、仮面でも被っているかのような心地で尋ねた。

「お前の中にある衝動、気持ちはどう処理するのだ？ どこへ持っていく？

内側のため込み続けて、耐えられるのか？」

伊吹は、吉野の顔を見ていた。

もしかしたら、このずっと見つめてきた吉野の顔、冷静で優しくて冗談が分かり、人の仲を取り持つ、成績のよい野球部所属の高校生という顔も、彼にとってはただの仮面に過ぎず、内側には全く違った吉野がいて、まるで違う顔をしていて、その爆発的な感情の持っていく先を、ずっと探し続けているのかも知れない。いや、きっとそうなのだろう。だからこそ、こんなことになったのだ。

雨風の湿った冷たい匂いが吹き抜けて、浴衣では寒く感じられた。

すると、吉野は当たり前のように言った。

「だから、伊吹だよ。そのために、お前に告白したんだよ」

「これからはお前と付き合って、そこで気持ちのバランスを、保てるようにしたいんだよ」

「……」

伊吹は、その言葉の意味を考えていた。

「分かる、かな、伊吹」

「……」

いや。

意味を考えることに意味がないであろうことは、すでに伊吹にも分かっ

ていた。

吉野はそんな、伊吹が以前に頼っていたような、論理や合理によって動いている人間ではない。考えて受け止められるような人間ではない。それはもう、明らかだった。

話を聞いての通り、吉野はとつくに、筋道を立てた考えを放棄している。そうやってずっと生きてきている。だったら、それを「分かる」ことは出来ない。考えることは無駄だ。

あるいは——何とかして、吉野の気持ちを受け止めようとしていたのだろう。

吉野の思いをそのまま、理屈ではなく、受け止める。

何とか、受け止めてあげたかった。

せつかく好きになれた、相手なのだから。

「伊吹なら、分かってくれると思つて、だから今まで話してきたんだ。俺のあんな家の現状を見せたのも、それと同じ理由だ。伊吹は、表面上は理屈で生きようとしているけど、それだけじゃない。内心ではいろんな気持ちで渦巻いていて、今まではそれに蓋をしていたんだと俺は思う。そうじゃないか？」

「……」

ただ。

受け止めてしまつていいものなのか、そこだけが伊吹には気になつていた。

「伊吹のことはずっと見てきた。一見冷たそうに見えても、そうじゃないことは俺にも分かった。理屈とか筋道以上のものが伊吹の中にはあつて、本当はそれで動きたいんだよ。でも、それを認めることが出来ない。出来ていない。だから、辛いんだ。だから……よかつたら、俺と付き合つてくれないか？」

「……」

経験のない伊吹にとって、それがよいことなのかどうか、判断が付かなかった。他の人、エレーナや祐理名さん、あるいは、自分の母はどうなのだろう。好きな人の気持ちを受け止めるということは、どのようなことなのだろう。許されることなのだろうか。例えその相手が人間として破綻し

ていて、人殺しであったとしても、それでも許されるものなのだろうか。
この吉野の気持ちを、正面から素直に、受け止めてしまつてよいのだろうか。

好きだという気持ちに、従うべきなのだろうか。

「俺と一緒に生きて欲しいんだよ。もっと楽に、幸福に生きる方法があると思うんだ。俺は少なくとも、あの鬼を身体の中に捕まえて、人間とは思えないような感覚や感情を腹の内に作り上げて、それでずいぶん、楽になった。ようやく、生きていくという感覚が味わえるようになった。だから、伊吹もそうなって欲しいんだ。俺は、伊吹のことが好きだ。可愛いと思う。どうしようもなく愛おしく感じる。だから、伊吹にも俺と同じように、なつて欲しいんだ」

「……」

伊吹は無表情のまま、吉野の言葉を聞いていた。

吉野の言うことは、伊吹には分からない。理解できない。けれど。

彼を受け入れてやりたい。

そう思った。

もう彼に、辛い思いをして欲しくない。

そう感じた。

伊吹は一步、足を踏み出す。

吉野の方へ、近づく。

「俺はもう人を殺したりはしない。その代わり、お前のことを心から愛す。愛したいんだ。お前のために生きていんだ。それでやつと、バランスが取れる。そう思う。やつとまともに、生きていけると思う。伊吹のことが、可愛くて仕方ないんだ。大切なんだ。どうこの気持ちを伝えていいかわからなくて、ずいぶん悩んだんだけど……でも正直に、全て打ち明けるしかないな、と思った。今日、それを話そうと思ったんだ。きっと、伊吹なら分かってくれる。一緒になつてくれる、と思った」

吉野は言う。

「……俺と、付き合ってくれないか？」

そのあまりに単純な言葉が、伊吹の中に染み込む。

伊吹は目を閉じ、息を吐いた。

伊吹は一步一步、洞穴の中を歩き、吉野の方へと近付いていく。履いている草履が、石に擦れる音が聞こえる。外では雨音がさざめいている。浴衣はすっかり湿っていた。

何が正しいのか、何が正しくないのか、今の伊吹にはもはや分からない。吉野が本当に人殺しをやめることが出来るのか、それも疑問だった。ただ、はつきりと感じられるのは、今、吉野を救ってやりたい、吉野を受け入れてやりたい、という、ただそれだけだった。

彼と一緒になれば、少しは幸福になれるかも知れない。

伊吹はそう、思った。

顔を上げ、吉野を見る。

彼はいつもと何も変わらない、優しく誠実な眼をしていた。

うなるような音が、洞穴の奥から聞こえる。

伊吹は彼に、手を伸ばした。

4.

「ヤー!!!」

そんな声が洞穴の外から聞こえ、びっくりとした伊吹は振り返った。

外には——雨にぐっしよりと濡れた、すうくんが立っていた。

すうくんは、目を爛々と光らせていた。頭の前から水に浸かったように濡れそぼり、髪からは、水滴がぼたぼたと滴っている。着ていた浴衣は帯が解け、身体に貼り付き、その合間からは、白い肌が露わになっていた。

これまで見たこともないほど怒りを浮かべた表情で、伊吹と吉野の方を睨み付け、荒い息を上げている。彼の怒声が、洞穴の中に反響した。

片手には、あの鬼の假面を握りしめている。

「すう……くん……」

伊吹は呟く。なぜ彼がいるのか分からなくて、思わず、ふらりとすうくんの方へと足を向ける。

吉野に背を向ける。
すると、そのとき。

「……あああ」

吉野のものではない、唸り声のような低く重い音が、洞穴の奥から響いて聞こえた。

伊吹は再び、そちらをちらりと振り向いた。

社の前に立つ吉野、その背後に、

恐ろしく大きな影が見えた。

伊吹は、顔を歪める。

次の瞬間。

その大きな影は、歯を剥き出した口をぱっくりと開くと、

吉野を頭から、くわえ込んだ。

吉野の表情はあつという間に、その巨大な口の中に消える。

そしてそれは、鋭い歯で吉野の頭を噛んだまま、持ち上げた。吉野の大きな身体が、ふわりと宙に浮く。

伊吹は物も言わず、ただ彼を見上げる。

すでに力をなくし、垂れ下がった彼の腕と脚が、それになされるまま、ぶらぶらと揺れている様が見えた。薄暗い照明の下、まるで壊れたマリオネットが、つるし上げられているかのようなだった。

そうしてすぐに――。

どきり、と音を立てて、吉野の首から下の身体が、伊吹のすぐ目の前に落ちてきた。

伊吹はその姿を、見下ろしている。

凄まじい勢いで首の断面から血を噴出しているその身体は、まだびくり、びくりと、腕や脚を痙攣させていた。一瞬で社の周りが、血の海になっていく。吉野の着ていたシャツも短パンも、たちまち真っ赤に染まった。吉

野の首の断面からは、裂断した筋肉や、骨が見えていた。

伊吹は再び、洞穴の奥を見た。

そこには——あの最初の日、渡邊教授の家の庭で見た、救いようもなく禍々しいあの鬼が、寂しげな眼をして腰を曲げ、這いつくばっていた。

それは、全身が見えないほど、大きくなっていた。

真つ暗な洞穴の中、小さく膝を抱えていたから、つい先程まで気づけなかったのだろうか。いや、むしろあまりに、大きすぎたからかも知れない。

ばりばり、と噛み砕く音が聞こえる。

「……ああ」

その鬼は、吉野の首を咀嚼して呑み込むと、また小さく短く、そううめいた。

ため息のように聞こえた。

「やああ！」

すうくんの声が、すぐそばで聞こえる。その小さな手に、浴衣の裾を懸命に引かれる。

引かれるままに伊吹はふらふらと、洞穴の外へと歩み出て行った。洞穴の中には、ぼんやりと光を放つ吉野の懐中電灯と、古びた社、鉦と面と吉野の残骸と、それから、吸い込まれそうなほど真つ暗な眼をした、巨大な鬼がいた。

鬼の眼は、伊吹を捉えていた。

5.

大雨の降る外へ、伊吹は転び出る。

そして地面に腰を付いて、動けなくなった。ここ何年も見たことがないほどの、激しい雨が降り注いでいた。伊吹の浴衣は一瞬でぐしょ濡れになり、土に汚れ、肌貼り付く。眼鏡に水滴が付いて、前がよく見えない。洞穴の中からは、何かを食べる生々しい音が聞こえた。

「あああ……あああ……」

口を動かしている大鬼の音が、外まで漏れ出てくる。

嘆き悲しんでいるようにも聞こえた。誰かを求めているようにも聞こえ

た。大鬼に意思があるのか、伊吹には分からない。ただ声は、救いを欲しているかのように感じられた。一体何を悲しんでいるのか、伊吹には想像もつかない。しかしその汚泥のようにねっとりとした心が、ただ音を聞くだけでも伝わってきた。

続いて洞穴からは、木々のへし折れる音、おそらくは、社の崩れる音が聞こえる。そして、ついに大鬼が、頭をぬつと、外に出した。鬼は伊吹の方を、ぎろりと見る。

その口元には、血が大量にこびり付いていた。

雷鳴が鳴り渡る。

伊吹はふと、すぐ傍らを振り向いた。

そこには、假面を顔に付けた、すうくんが立っていた。

空を裂いて落ちる雷の光に照らされる、小さな幼子の身体をした彼は、誰よりも誇り高い気をまとって、伊吹のそばにいた。

假面の向こうの眼は、大鬼へ向けられているようだった。じっと、巨体の化け物を見据え、小揺るぎもしない。

その姿を見て、伊吹は本当の意味での力というものを感じた。

すうくんの立ち姿は、美しかった。迷いも惑いもなく、今は怒りも哀しみもない。正も邪もなく、すうくんは己の前を見据えていた。彼の身体に漲るものは、つい先程まで伊吹が取り込まれようとしていた意思とはまるで対照的な、至純にして、高貴な生命だった。

伊吹には今になり、曾祖母の言っていた言葉、「見たときにすぐ分かった」という意味が、はっきりと分かった。吉野のように人が鬼になったとき、それは、混沌と胡乱の塊になる。元あった人の生の形が腐れ崩れ落ち、破綻し、戻ることのない絶望の道へと入り込んでいく。今、すぐそこにいるあの人食い鬼も、また同じことなのだろう。けれど、すうくんはそれと逆だった。

あの鉄道事故の日、谷で見た大きな鬼神、スクナ様。大樹のように聳え立つ影。

例え子どもの姿になろうとも、すうくんは、何も変わっていなかった。

——鬼神は人になっても、魂は神のままなのだろう。すうくんは何も言わず、大鬼へ飛びかかっていった。

鬼の足下へ駆け寄ると、その巨体に、すかさずよじ登っていく。岩のようにごつごつとした化け物の肌のあちこちを器用に掴むと、たちまち、大鬼の頭の近くまで登り切った。大鬼は、自分の身体に取り付いた小さな者を見つけることが出来ず、その大きな手で、不器用に空を搔く。

すうくんは、大鬼の頬の皮膚に爪を立てると、それを一気に引き剥がした。

肌の裂け目からどろどろと血が流れ出し、大鬼はまた嘆きの鳴き声を上げた。

そして、痛みに苦しんだ大鬼は頭を振る。すると、顔にしがみついていたすうくんは、一気に跳ね飛ばされる。

まるで砂粒のように宙を飛んだすうくんは、そのまま、近くの木に身体を叩き付けられた。鈍い音が聞こえ、跳ね返された彼は、水音を立てて地面に落下する。泥水に塗れ、豪雨に打たれていた。伊吹は助けに行かなければと思うが、まだ動くことが出来ない。

そして再び起き上がったとき――。

すうくんは、あの凛々しい少年の姿になっていた。

「すうくん！」

雨音の中でも聞こえるよう、伊吹は精一杯の声を上げる。

すうくん、いや、スクナ様は振り向くと、伊吹をその四つの眼で見た。

人ならぬ者の眼差しは、人の心では推し量れない力で充たされていたが、しかし伊吹はその中に、同時にあのすうくんの眼を見た。

幼く暖かく、優しい笑みを浮かべた、すうくんの心を、伊吹はそこに感じた。

強い雨に濡れ、スクナ様の髪から水が滴っている。小さな浴衣はとつくに脱げ、彼は裸を晒していた。鍛えられたしなやかな筋が、雨粒を弾く。犬のように尖った鼻筋にも、耳元まで裂けた口にも、夏の驟雨が容赦なく流れていた。

頭から伸びる捻れた双角は、黒く妖しく輝いていた。

伊吹と同じ、大人でもなく子どもでもない、まだ何者でもない年頃の姿

になったスクナ様は、正面に向き直ると、際限なく膨れあがった人食いの大鬼の態を見上げる。

この少年の身体になったとしても、体格の差はあまりに大きい。数え切れないほどの人間を食べ続けて、大鬼は元の矮軀を、この大きさにまで育てたのだ。

しかし、伊吹は気づいた。それにしても、大鬼の身体は初めと同じ、痩せ細った形のままであった。

腹だけがぼっこりと膨らんでいる。それを見て、伊吹は高校の教科書で見かけた、絵巻物の中の餓鬼の姿を思い出した。

遙か昔の路地端に座り込み、物欲しげにしている痩せた不気味な鬼の絵。今の大鬼は、それと同じ姿をしていた。ただ、著しく大きいだけだった。

大鬼は顔を天に向け、口を開くと、辺り一帯に響き渡るような、激しく大きな哭声を上げた。

顔からだらだらと血を流す大鬼は、長い両腕を振り回すと、スクナを叩き潰そうと執拗に攻撃してくる。手が地面に振り下ろされる度、土が陥没し、辺りが揺れた。空が切られ、伊吹の元にも風が吹き付ける。ごう、という風切り音がする。

スクナは素早く動き、その手を避け続けた。そして大鬼の隙を見計らうと、たちまちその片足に身を寄せる。そして足下からすくい上げるように、全力で押した。

バランスを崩した大鬼は、しゃがんでいた姿勢からそのまま倒れ込む。どう、という凄まじい轟音と共に木が数本へし折れ、山が大きく揺れた。

伊吹は腰を抜かしたまま、そんな鬼たちの戦いを、見守ることしか出来なかった。

スクナはすかさず手近な折木を拾い、横倒しになった大鬼の身体によじ登ると、顔に向けてその身体の上を駆け出す。そうして途中で高く飛び上がる、口を越え鼻を越え、鬼の右目に向けて、先の尖った木を深々突き刺した。

大鬼は再び、町にまで届くほどの大きな唸り声を上げた。

スクナは、眼球に突き立てた木を、ぐりぐりと廻す。そして、引き抜いた。またしてもそこから、透明な液体と血が迸り、スクナの全身に掛かっ

た。それをまともに受けてしまったスクナは、僅かに顔を手で覆い、身を横に逸らす。

その瞬間。

大鬼は片腕を付いて、身体を起こした。

顔に乗っていたスクナは、そのまま転がり落ちてしまう。

人食いの大鬼は、右目から体液を吹き出し、頬からは血を流し、これまで見せたことのなかった憤怒の形相になっていた。裂けた大口を開き、針のような歯をぎりぎりとしらせる。残った左目で、己に深傷を負わせた者を探している。

間の悪いことに、スクナは鬼の手のすぐ近くで、立ち上がろうとする最中だった。

大鬼は、スクナの身体を片手で鷲掴みにした。腕が曲がろうと、片足が折れようと、気にも留めず、節くれ立ったその手でスクナを捕らえ、ひとしきり力を加えるやいなや、大鬼は怒りにまかせて、スクナを洞穴のある山へと投げつけた。

伊吹は、血の気が引いた。

スクナは、岩肌に叩き付けられる。そしてそこからずると、下へ落ちていった。スクナが衝突したところには、人の形に血の跡が残っていた。

全身の力が抜けていた伊吹だったが、そこで何とか起き上がると、スクナの元へとふらふら駆け寄った。間近に、傷ついた彼の姿を見た。

彼の腕も脚も、あらぬ方へと曲がり、全身からだらだと血を流していた。顔もべったりと血に塗れ、どこもかしこも腫れ上がった、ひどい有様だった。元がどんな顔だったかも、よく分からない。

伊吹はまた、その場にへたり込む。

完全に意識を失っているスクナは、息も絶え絶えの様子だった。かといって、今この場で伊吹に出来ることはない。手当を出来るような状態ではない。否、そういう問題でもなく、例え手当をしたところで、状況は何も改善されないだろう。

荒い息の音を背後に感じ、伊吹はゆるゆると振り返った。

すぐそこには——大鬼の、巨大な顔があった。

伊吹の全身ほどに大きい顔が、すぐそばまで迫っている。身体を起こし

た大鬼は、深々としゃがみ込み、上半身を落として、犬の伏せのような姿勢を取っているらしかった。歯を剥き出し、伊吹とそしてスクナを、凄まじい形相でじつと見据えている。

歯の隙間から、鼻から、繰り返し荒い息が漏れだしている。さつき倒れたときに折れたのか、その歯が数本なくなっていた。眼からはまだ、得体の知れない液体が流れ出している。血の鉄臭い匂いが、伊吹の鼻を突く。

残った左目がぎよるぎよると蠢いて、伊吹を捉えていた。

伊吹は、その眼球に反射した自分の姿を見た。

怯え、震え、ぐっしよりと濡れて地面に座り込んだ、一人のただの非力な少女に過ぎなかった。

「ふうううう……ふううううう……」

鬼の声が、その喉から次第に響きだしている。大鬼は、どうしようもなく醜かった。身近に見ると、その薄汚さがはつきりと分かった。

宇治川の言う鬼と鬼、スクナとこの人食いの鬼は、名が同じでもこれほどまでに違うのだ。人喰いの大鬼の顔には、内面の澱んだ気、思いが吹き出していた。悪意、邪念、傲慢、瞋恚、何と呼ぼうが変わらない、膿み腐れた心が、溢れていた。ああ、遠目に見れば虚ろに哀れに見えようとも、その実は、こんな澱が充ちているだけなのだ、と伊吹は理解した。

そう、きっとそうなのだ。真実この鬼が、以前に澄哉から電話で聞いたように、足軽が鬼と化してしまった哀れな存在なのだとしても、その物語が、どれだけ哀れなものに聞こえたとしても、この化け物、この鬼の内側には、薄汚れた救いようもない汚泥が、堆積しているに違いない。それが見て取れた。

——そして自分は、つい先程まで、そんなものに魅力を感じていたのだ。

伊吹は自分の傍らで苦しげに息をするスクナの姿を、ちらりと見る。彼に止めてもらわなければ、今頃伊吹は、そんな心を受け入れていたところだった。

スクナは、血に塗れた今もなお、美しかった。

これほどまでに魂の違いは、現れてしまうものなのか、と思った。

6.

再び大鬼は、大きな唸り声を上げた。

その時伊吹は、澄哉から聞いた、あの人食い鬼の物語を思い出した。

自身の先祖であろう、行者の為したこと。

——自分が同じことが出来るとは、思えないけれど。

このままでは伊吹もスクナも、あっけなく殺されて終わるだけだろう。

それぐらいなら、一つでも何かをして、大鬼に傷を負わせて、それで終わった方がマシだ。

そう決めた伊吹は、まず、大鬼の気を引くために立ち上がる。大鬼はあいにく、倒れて動かなくなったスクナに、狙いを移そうとしていたところだった。そこで伊吹は、近くの石を拾って投げつけた。石くれは、皮膚の剥がれた鬼の赤剥けの頬に当たった。大鬼はそれで、またしても伊吹へと意識を戻した。そして伊吹に向かって、その大きな手を伸ばそうとする。

伊吹は、そこで素早く身を翻すと、背後の洞穴の中へと駆け戻った。

雨音が瞬時に消え、周囲が静まり返った。伊吹は片手にまだ、懐中電灯をしっかりと握っていた。大鬼は緩慢な動きで身をかがめ、伊吹の後を追って、洞穴へ入ってくる。伊吹は可能な限りの全力で、走り続けた。

雨で濡れそぼった浴衣が邪魔になった伊吹は、その場でそれを脱ぎ捨て、下着姿になった。そして急いで、辺りを懐中電灯で照らす。すると、大鬼に踏まれたのか、崩れ落ちたあの社が光の中に見えた。

千年以上もの間隠野を鬼から護り続けていた社は、あっさりと潰れてしまっていた。けれど、それにいつまでも拘ってはられない。伊吹はそこへ近寄ると、手当たり次第に社の残骸をひっくり返して、あるものを探した。

探していた鉈は、吉野の血の海に浸って、転がっていた。

伊吹はそれを手に取ると、鞘から抜く。

そうして背後に隠したまま、鬼の方へと振り返った。

自分を狙っている大鬼に向かって、伊吹は大声で、こう叫んだ。

「おい大鬼！ 私の言葉が分かるか！」

大鬼は首を捻ると、伊吹を残るたった一つの眼で見据えた。伊吹の声は、洞穴の中で反響する。

「分からなくてもいい！ どうだ！ 私を食べたいのか!?」
「……………うおおお！」

大鬼はそれに応えて、地響きがするほどの唸りを上げた。伊吹はその声に怯え、またへたり込みそうになる。しかし、何とかそれを堪えた。

「……………な、ならば、私を、呑んでみなさい！ ただし、食べるならば、一息で、呑みなさい！」

何とか自分の震えを抑え、昔話の行者と同じ台詞を、再び叫んだ。

あの行者は腹の中に入り、呪文を唱えて鬼を小さな姿に戻したという。だがそんなこと、もちろん自分には出来ない。自分はただ、呑まれるだけだ。せめてそうして隙を作れば、鈍で一撃を加えることも出来るかも知れない。単にそれだけの、考えしかなかった。勝算などどこにもない。ただ覚悟を決め、挑む。他に術など、見あたらなかった。

鬼は動こうとしない。

高みから、伊吹を見下ろしている。

「ど、どうした！ た、食べないの、か！」

身体ががくがくと震える。声が裏返る。

映画のヒロインのような、格好のよい振る舞いなど、本当にこんな状況になったら出来るはずもなかった。死の恐怖に怯え、巨大な化け物に怯え、それでも凜と出来る人間など、いるわけがない。

自分は本当に、理屈ばかりの人間だった。筋を通すことが何より大切だと思ってきた。けれど、こうして身一つで死と向かい合い、自分出来ることを考えてみると、何もなかった。

天才少女と持ち上げられて小さい頃から育てられてきたが、たった一人の裸の人間になってみたら、ただの恐がりの、怯えるばかりの、ちっぽけな少女でしかなかった。自分のあまりのつまらなさに、涙が出そうになる。

でも、それでも何かをしよう、何かをしなければならぬ、と思ったとき、今になってようやく、伊吹は自分が自分本来の姿になれたような気がした。

本来の、といっても、別に何も立派なものではない。すうくんのように崇高な存在になど、ひっくり返ってもなれっこない。一人の人間に、やっとなれた気がしたのだ。理屈だの学問だの父だの家族だのという、ごてご

てしい飾りが全て外れて、今初めて、単なる人間になれた。そんな気がした。好いた男に憧れ、人の道を外れることもない、空っぽの、何でもない人になれた。

それは、巨大な鬼の目の前で、鈍一本を持ち、ぐしょ濡れのスポーツブラにパンツしかまにとっていない姿で震えている少女でしかなかったけれど、それでも、伊吹そのものだった。

「こ、怖いのかあ!? 早く……早く食べる!」

伊吹はもう一声、そう叫んだ。

鬼は聞こえてはいるものの、どうやら片眼を潰されて、暗闇の中では今ひとつ、伊吹の居場所が分からないらしかった。伊吹のいる辺りを、漠然と見下している。伊吹は懐中電灯を振り回し、鬼の気を引いた。

すると、やっと鬼は、伊吹の方をまっすぐに見た。

異常なほどの力が、その眼差しから伊吹に注がれた。

——ああ、自分は喰われて死ぬのだ。

伊吹はそう、深く理解した。

目を瞑った。

そのときだった。

伊吹は——鬼の背後から走り寄る足音に気づいた。

はっと眼を開く。

鬼の背後には、影があった。

その影は手に、鋭く尖った鬼の折れた歯を持っていた。

影は、伊吹の方を向いて俯いている大鬼の背にあつという間に駆け上ると、一瞬のうちに、その首筋にまで至った。彼はそこに立ち、泥だらけの鬼の、髪の毛の間を見据える。

そして彼は——スクナは、高々と振り上げた鬼の歯を、大鬼の首筋に満身の力を込めて、深く刺した。

「ぐああああああああああああああああああ!」

延髄を刺された大鬼は、苦しげにそううめくと、身を震わせた。スクナは再び背から落ち、洞穴の地面に転がると、小さく身を伏せた。

かはっ、と乾いた一息を吐くと、大鬼は前のめりに、ばたりと倒れ込んだ。

激しい地鳴りと共に地面が揺れ、土煙が舞い、伊吹は立っていられない。思わずしゃがみ込んだ。

そして、大鬼は動かなくなる。

伊吹はしゃがんだまま、目の前に倒れた大鬼の姿をしばらく見つめていたが、じきにぺたりと、その場へ力なく座り込んだ。何が起きたのか分らず、ぼんやりと前を向いている。

——終わった？

次第に土煙が晴れる。ふと気づくと、いつの間にか隣には、スクナが立っていた。あの短い間に、来てくれたらしい。

スクナは全身に傷を負い、自らの血に塗れ、片腕と片足がまだ半ば折れたままのようだったが、それでも立って、伊吹を見ていた。

彼は伊吹に、折れていない方の片手を差し出した。

伊吹はその手を見ているうちに、何となく、ああ、と理解する。

——まだ、やることがある。

伊吹は彼のその手を取ると、震える脚を何とか抑えて立ち上がった。

そして彼と共に、大鬼の頭のそばへと近付いた。一步一步、確実に、迷うことなく向かう。洞穴には雨水と、泥と、血と、木屑が飛び散り、どろどろとして、足下をすくわれそうだった。

——そうだ。

——きちんと、息の根を止めなければならぬ。

伊吹はスクナと手を取り合って、大鬼の喉まで来た。それから、彼と目を見合わせると、持っていた鉦を二人で共に握った。振り上げる。

二人は、大鬼の喉笛を、切り裂いた。

凄まじい勢いで、肌の裂け目から血が噴き出した。伊吹はその鮮血を、全身に浴びる。鬼の血の圧は強く、おまけに、火傷しそうなほどに熱かった。驚いた伊吹は、身を怯ませる。けれど、逃げはしなかった。スクナと力を合わせ、ゆっくりと上から下へ、喉を裂いていく。伊吹の身体は、真っ赤に染まる。生き物には血が流れているのだ、と伊吹は改めて思う。

そうしていつしか——血の流れは、緩やかになった。

鬼の首筋を川のように穏やかに流れる血を見て、伊吹はようやくよく、本当に自分の身体から力が抜ける気がした。やっと、終わったのだ。しかし今

は、まだ倒れる気にはならない。一緒に鈍の柄を握る、スクナを見やる。スクナもまた、全身から血液を滴らせていた。朱に彩られた顔、鍛え上げられた身体で、伊吹の方を向いていた。その中で、四つの眼だけが黒く、伊吹を見返している。それは、これまでになく優しく、静かな眼をしていた。

伊吹は迷わず、彼の身体に抱きついた。

彼の身体からは、血と汗の匂いがした。暖かかった。そして、肌を触れ合わせると、心地よかった。その筋張った腕や胸が、逃げずに伊吹を受け止めてくれた。

スクナと抱き合った瞬間——伊吹は、自分の胸に異物感を覚えた。

見るとそこには、ネックレスが下がっていた。

吉野にもらった、木彫りのネックレスだった。

きつと、鬼の面を手に入れたときに、同じ店で一緒に買ってきたのだろう、と思った。

引き千切って捨ててもいい、と思ったけれど、でも、出来なかった。

伊吹はなおさらしつかりと、スクナにしがみつき、彼の身体を感じる。

身体をすり寄せる。

力を抜き、ゆっくりと息を吐いた。

それから——どうしようもなく悲しくなった伊吹は、ようやく泣き出した。